

砂場の遊びを通して

＜実施時期＞
5 歳児
5 月

○**ねらい**: 友達と一緒にイメージしたものを作ったり、作り変えたりすることを楽しむ。

○**内容**: 上手くいかないときや困ったときに、どうしたらいいか考えたり、遊びの見通しをもったりする。

A 児、B 児らが、砂場で『ウォータースライダー』を作るため、砂山を作り、ビニールシートを巻いた板を作った砂山に斜めに立てかけようと試みていた。板を滑り降りた先には、水を溜めるための穴が掘られていた。

年長児が砂山を作り始めたことに気が付いた年少児の C 児も、ぞうさんじょうろに水を入れ砂場へ来た。水を溜める穴は掘りかけのため、B 児が、「こっち（穴）じゃなくて、山にかけて。」と C 児に伝えた。C 児は、砂山へ行ったかと思うと、砂山の上に登って水を掛けた。そのため、C 児の重みで砂山は崩れてしまった。

突然のことで、A 児らも予想外だったが、それを見た A 児は、数秒黙っていたかと思うと、随分と落ち着いた様子で、「まあまた作ればいいよ。」と笑って言っていた。「それくらいなら直るでいいよ！おれやるわ！」と B 児も応じ、みんなで砂山を作り直した。これまでの経験から、砂の性質や作り直すまでの時間の見通しをもつことができ、「すぐに作り直せる」と考えたのだと思う。

A 児らの姿に、教師は、「A 君たちがまた作ればいいって言ってくれたから、C 君も安心したと思うよ。」と声を掛け、相手を思いやることのできた自分たちの素晴らしさに気付けるようにしていった。

C 児は一度場を離れたが、しばらくして戻ってきた。このときは、先程の経験から、A 児らは、「C 君、登ったらだめだよ。」（手を引き、指で示しながら）ここなら、水かけてもいいよ！」と C 児に伝えていた。教師も、C 児の傍らで、山を崩さないように見守りつつ、C 児に水をかけてほしい場所を知らせていた。

十分な穴の大きさになると、その穴にブルーシートを敷き、水を張った。砂山に板を立てかけることもできると、ついに『ウォータースライダー』が完成した。試しに A 児が滑ってみると、水の感触が心地よく、楽しい雰囲気が醸しだされた。その雰囲気や楽しそうに遊ぶ様子に刺激を受け、3 学年が一緒に遊ぶ姿が見られ、次第に A 児ら年長児が、年中・年少児に滑り方を教えたり、並ぶことを伝えたりしながら遊びを進めていた。

（省察）

日常的に異学年が入り混じって遊ぶことで、こうしたハプニングも起こり、下学年とのかかわりを通して、自分よりも小さい子を思いやるという経験となっていく。その経験や、そうした姿を教師が言語化して価値付けていくことで、思いやりの気持ちが身に付いていくのだと考える。

また、年少児の頃から慣れ親しんで遊んできた砂場であり、水を入れたり、型抜きをしたりなどの遊びを通して泥山の土と比較し、子どもたちは砂の性質を理解していたと考えられる。自分が知っている知識や、これまでの遊びの経験から、砂山を作り直す見通しをもつことができ、困った場面にも柔軟に適應していったのだと考えられる。子どもたちが体得していった知識や技術は、子どもたちなりに使いどころを考え、遊びの中で活かしていくのだと感じた。

そして、自分たちの力を発揮し、充実感を得ていくことで、“もっと〇〇してみよう”という遊びに対する意欲となっていくのだと考える。



環 境

- ・砂場を耕しておき、遊びやすくしておく。
- ・シャベルやスコップのほか、ビニールシートや板など、一人では扱えないものを準備し、協力する場面へとつなげる。

教員・保育士の支援

- ・相手を思いやる姿を大いに認め、思いやる気持ちに気付けるようにしていく。
- ・やり直しができる砂場の性質や可変性を知らせ、作り変える楽しさを感じられるようにする。

○幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

（幼稚園教育要領・保育所指導指針・幼保連携認定子ども園教育・保育要領より）

健康な心と体	○	思考力の芽生え	
自立心	○	自然との関わり・生命尊重	○
協同性	○	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	
道徳性・規範意識の芽生え	○	言葉による伝え合い	○
社会生活との関わり	○	豊かな感性と表現	

○小学校生活とのつながり

- ・身近な環境や物などの性質に興味をもち、調べたり、表現活動に取り入れたりする。
- ・友達のことを思いやり、学校生活を仲間と共に楽しく過ごしていく。